

平成25年8月～9月 中央図書館特集展示リスト

# 市川の文学

## 小説編 (2000年以降)



市川市中央図書館

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/library/db/1031.html>

	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
1	赤瀬川 隼	甚五郎異聞	日本放送出版協会 2004	p231 “最初に、平川河口から大手門近くまでの道三堀、さらに行徳から塩を運ぶために、隅田川の東岸の河口近くにつながる小名木川を掘った。”(江戸番匠)
2	新井 千裕	図書館の女王を捜して	講談社 2009	作中の図書館は、市川市中央図書館がモデルです。
3	飯嶋 和一	始祖鳥記	小学館 2000	第二部では行徳の塩問屋伊兵衛が登場。欠真間、上妙典、関ヶ島などの地名が出て来る。 p140-141, 147,152-153
4	井川 香四郎	情け川、菊の雨	学研 2005	p153 “食べ歩きは千代田城界隈から、浅草、駒形、山谷から、行徳、小松、牛島あたりまで及び・・・”(第三話 銀杏散る 一)
5	伊吹 昭	孤高の系譜	文芸社 2002	p284 “小網町の河岸から、行徳の船場にむかう船上に武蔵の姿があった。・・・”
6	岩井 三四二	むつかしきこと承り候	集英社 2013	p106 “成田街道とも呼ばれる佐倉道は、東海道や中山道などの五街道ほどではないが、道幅は二間から三間あり、市川宿をはじめ・・・” 他p120(下総茶屋合戦)
7	宇江佐 真理	神田堀八つ下がり	徳間書店 2003	江戸の河岸沿いに住む様々な人々の人間模様を描く一篇。(愛想づかしー行徳河岸) p201
8	宇江佐 真理	さらば深川	文芸春秋 2000	p106 “行徳河岸は日本橋に近い小網町にある。普段は地方からの荷が届く所である。・・・”(ただ遠い空)
9	歌野 晶午	女王様と私	角川書店 2009	p10 “県道59号市川印西線通称木下街道に出て最初の交差点で、雨ににじむ赤信号を見つめながら、・・・(中略)・・・北方十字路の交差点で・・・”
10	内田 康夫	中央構造帯	講談社 2002	名探偵浅見光彦シリーズの一作。死体が発見された場所として八幡不知藪が出ており、周辺の市役所、図書館が舞台として登場する。 P74,107,123,140,462
11	大崎 梢	平台がおまちかね	東京創元社 2008	p131 “私が市川店にいたときだから、かれこれ七、八年前になるかしら。・・・”(贈呈式で会いましょう)
12	大沢 在昌	語りつづける、届くまで	講談社 2012	p326～338“「ええと、自宅は市川だといっていました。駅に近いだけがとりえのアパートだって」・・・「すみません、急に電話して。今、市川駅にいるんですけど、変な連中からまれて」”
13	大屋 研一	大利根開化伝	三五館 2002	江戸川と市川河岸、行徳河岸も描かれている。 p111 “市川河岸が見えたきた。その上手は切り立った崖になっている。江戸川の流域で最も目だつ高台である。・・・”

	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
14	押川 國秋	中山道の雨	講談社 2006	p180 “「ああ、そうか、あれは下総の行徳の話だっけ。地廻り塩問屋の旦那が話したんだ」”他 p183
15	乙川 優三郎	闇の華たち	文藝春秋 2009	桜田門外の変を佐倉藩の隠密が回顧する内容であり、行徳河岸から行徳街道や八幡が描かれている。(面影) p148
16	乙川 優三郎	かずら野	幻冬舎 2004	関宿、深川、行徳、木風、銚子と千葉県を流転する時代小説。特に三章は、すべて行徳が舞台であり、成田街道往還の様や、行徳の塩焼きと旅籠での女中たちの働く様がうまく描かれている。
17	乙川 優三郎	さざなみ情話	朝日新聞社 2006	行徳河岸から江戸川河口までの様子を描く。妙見島や浦安の猫実、堀江などの地名が出てくる。
18	乙川 優三郎	芥火	講談社 2004	下総・行徳生まれの主人公かつ江を通して市井の哀歓を描く。p36
19	角田 光代	マザコン	集英社 2007	p145 “モンちゃんは千葉の本八幡に住んでいる。…”(ふたり暮らし)
20	角田 光代	八日目の蟬	中央公論新社 2007	p13 “総武線に乗る。…(中略)…本八幡で降り、康枝のマンションに向かうあいだ、私は言うべきことを幾度も反芻する。…”
21	門井 慶喜	小説あります	光文社 2011	p88 “「…お住まいは市川だそうですよ。あしたあたり、そこを訪ねれば、何かしら生活雑貨のようなものも」”他 p89,95,139,195,196,293,301,305,314,327
22	加藤 博理	真間交遊録	日本文学館 2004	市川市に実在する土地を舞台に繰り広げられる霊と魔法の物語。
23	加門 七海	大江山幻鬼行	祥伝社 2000	p133 “男の名は、仮に島田としよう。彼は東京から橋一つ隔てた、千葉県市川市に住んでいた。…” 他 p135
24	北 重人	夜明けの橋	新潮社 2009	p243 “かつての戦場、国府台を見ようと、行徳から川を遡った。…(中略)…戻りは行徳川には入らず、そのまま海に出た。”
25	木村 紅美	月食の日	文藝春秋 2009	p14 “最終に近い本八幡行きだった。幸正が岩本町駅でJR線から乗り換えると、…(中略)…二年まえにマンションを購入し引っ越してきた本八幡と、…”他 p25,30,34,39,47,81
26	京極 夏彦	邪魅の雫	講談社 2006	作品は、昭和二十八年夏、江戸川河川敷の毒殺事件を発端に始まる。小松川署や小岩などの地名が登場。p97

	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
27	桐野 夏生	冒険の国	新潮社 2005	p73 “野呂は先月、四十六歳になった。高校生と中学生の男の子がいて、行徳に住んでいる。…” 他 p77
28	桐野 夏生	メタボラ	朝日新聞社 2007	記憶喪失の主人公・磯村ギンジ＝香月雄太が回想する生育地として行徳が出てくる。 p421
29	日下 圭介	紅蓮の毒	光文社 2002	p302 “二人が黙り込んでいるうち、市川の駅を過ぎた。江戸川の鉄橋を渡った。終点の両国まで、あといくらもない。”
30	国枝 史郎	国枝史郎伝奇短篇小説集成 第2巻	作品社 2006	p63 “「真間の継橋へも参ったことであります。矢張りよい景色でござりました。ここにも継橋がございますな」(真間の手古奈)
31	小早川 涼	料理番子守り唄	学研パブリッシング 2010	p185 “その寺が、美代の方の実家、下総中山の智泉院らしいとの推察もできている。”他 (第三話下総中山子守り唄)
32	是枝 裕和	花よりもなほ	角川書店 2006	p118 “両国の大川から豎川に曲がったあたりに、行徳から塩を運んで来た船の船着場が出来ている。…”
33	佐伯 泰英	火頭	祥伝社 2001	時代小説「密命」シリーズ。 p198-p199 “「行徳行き船が出るぞう！」…”他 p201,202
34	佐伯 泰英	初陣	祥伝社 2002	時代小説「密命」シリーズ。第五章「菊小童妄想行」で行徳船に乗り成田街道を行く様子を描いている。
35	佐伯 泰英	遠謀	祥伝社 2006	時代小説「密命」シリーズ。 p116 “惣三郎の頭に数年前の、成田街道の始まりである本行徳河岸の外れでの出来事が浮かんだ。…”
36	佐伯 泰英	狐火ノ杜	双葉社 2003	時代小説「居眠り磐音江戸双紙」のシリーズ。第三章「行徳浜雨千鳥」とあるとおり、行徳が舞台で、江戸・小網町の行徳河岸から行徳についてまでの様が良く描かれている。 p184,189
37	佐伯 泰英	朔風ノ岸	双葉社 2004	時代小説「居眠り磐音江戸双紙」のシリーズ。第二章 p124
38	佐伯 泰英	万両ノ雪	双葉社 2007	時代小説「居眠り磐音江戸双紙」のシリーズ。 p144
39	早乙女 貢	七人目の刺客	文芸社 2002	p108-109 “お徳という女だった。本名はたみとか称ったが、行徳の漁師の娘だったので、…”

	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
40	坂岡 真	恋々彩々	徳間書店 2010	p138 “絵師は下総真間にある弘法寺の境内に立ち、…”他 p139,140(おつや:行徳帰帆)
41	佐木 隆三	成就者たち	講談社 2000	p224 “江戸川の千葉県側にあるアパートは、建設会社の社員寮である。…”他 p225
42	佐々木 譲	武揚伝 上・下	中央公論新社 2001	幕末、大鳥圭介率いる幕府陸軍の逃走経路として国府台が少し出てくる。下巻p110,112
43	さだ まさし	精霊流し	幻冬舎 2001	著者初の長編小説で、長崎と市川を舞台とした自伝的小説でもある。
44	さだ まさし	解夏	幻冬舎 2002	p181 “多少通学に時間はかかるが空気もひと味違う千葉県市川市を選んで住んでいた。…国府台の里見公園の桜が満開になった日の朝だった。”
45	さだ まさし	アントキノイノチ	幻冬舎 2009	p165-166 “「明日は市川の現場だったな」「はい」…”他 p177
46	佐藤 雅美	啓順凶状旅	幻冬舎 2000	江戸の頃の行徳河岸が一部出てくる時代小説シリーズの短編。
47	佐藤 雅美	半次捕物控 命みょうが	講談社 2002	p125 “「どこで耳にした？」「行徳船の中で」…”
48	佐藤 雅美	花輪茂十郎の特技	文藝春秋 2005	「八州廻り桑山十兵衛」シリーズの一篇。行徳の新河岸の様子が描かれている。また江戸の頃の成田、佐原への往還などがよく描かれている。p157,223,233
49	庄司 圭太	修羅の風	集英社 2002	p258 “三匠堂は上層に登ると、東は今井の渡しから下総の行徳、また西の方は富士山が望めるという。”(天恩山五百羅漢寺)
50	庄司 圭太	鬼火	光文社 2005	連作時代小説「岡っ引き源捕物控」のシリーズ4作目。主に江戸の行徳河岸がある小網町が舞台のひとつ。 p22
51	庄司 圭太	鸞	光文社 2005	連作時代小説「岡っ引き源捕物控」のシリーズ5作目。主に江戸の行徳河岸がある小網町が舞台のひとつ。 P19,370,378
52	庄司 肇	庄司肇作品集 第3巻	作品社 2003	p9 “亀戸、小岩、市川とすぎるたびに、かなりの数の人々をふりおとしてゆくのだが…”(旅へ…)

	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
53	真藤 順丈	地図男	メディアファクトリー 2008	p23-25 “東京都と千葉県の都県境に架かる市川橋で見つけたときも。そうだった。…”
54	千野 隆司	札差市三郎の女房	角川春樹事務所 2000	江戸の行徳河岸が出てくる。p123 “行徳河岸の船宿で、お邦と会うことになっていた。錠吉に導かれて、綾乃は『川甚』と看板の吊された宿屋に入った。”
55	柘植 久慶	首都直下地震<震度7>	PHP研究所 2006	東京湾北部を震源とする大震災をシュミレートした衝撃の近未来ノベル。P318-320は千葉県北西部の被害状況が語られている。P320
56	柘植 久慶	東京大地震2023	PHP研究所 2012	p268 “市川市塩焼は一丁目から五丁目までである。その北が妙典でこちらは一丁目から六丁目まであって、…” 他 p22,107,223,224,238,242
57	津本 陽	月とよしきり	集英社 2005	p8 “江戸小網町三丁目の行徳河岸を出て、八幡、鎌ヶ谷、大森、木風を過ぎ、香取から神埼へくるまでの船旅のあいだ、侍は羽織をかぶって寝ていた。”(供養旅) p75
58	出久根 達郎	秘画	講談社 2001	御書物同心日記のシリーズ。p122 “「この突き当りの行徳河岸だ。…」” p248(素麺)
59	東郷 隆	我餓狼と化す	実業之日本社 2006	江戸開城の頃から江戸を抜け出し各地で抵抗を続けた幕府方の人びとの戦いの生きざまを描写。p229-257,234,237,240(下総市川宿の戦い)
60	長辻 象平	元禄いわし侍	講談社 2005	作品中の房総往還の通過点として行徳の説明があり、江戸からの時間と距離が把握できる。p140
61	鳴海 丈	ものぐさ右近義心剣	光文社 2005	下総の銚子へ行く下りでルートの説明として一部。p50“行徳から茶船に乗って木下まで行けるのだが、「急ぐ旅でもないから歩いて行こう」と旦那・秋草右近様がおっしゃったのだ。”
62	鳴海 丈	乱華八犬伝	徳間書店 2007	第八章は千葉県が舞台。p353 “夜明けに、江戸川の河口に入って、成田街道の起点である行徳の船場に着いた。…”
63	鳴海 丈	城之介征魔剣	学研 2007	p396-398 “「あの…ここは、どこでしょう」「行徳だよ、下総の本行徳。お前さん、新川にぷかぷか浮いていたんだ。一体、どうしたんだね”
64	南原 幹雄	箱崎別れ船	ワンツーマガジン社 2005	p65 “今朝おくには、小網町の行徳河岸から船に乗って、木更津へむかった。”(木更津女中船)
65	西木 正明	其の逝く処を知らず	集英社 2001	p427 “茶毘に付された後、里見の遺体は里見家ゆかりの寺である、千葉県市川市の総寧寺に葬られた。”

	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
66	乃南 アサ	風の墓碑銘(エピタフ)	新潮社 2006	351-368ページで小説の舞台として本八幡駅、駅前のパティオ、京成八幡の踏切、住宅街、本屋を探すあたりと八幡界隈が描かれている。
67	花家 圭太郎	青き剣舞	中央公論新社 2006	江戸の行徳河岸周辺を描く。
68	早瀬 詠一郎	つげの箸	講談社 2009	p13 “「そのほう、下総の育ちであったな」「へい。市川の真間と申すところです。」”(天保下総土産)
69	葉山 修平	薔薇とペルソナ:小説三島由紀夫	沖積舎 2002	三島由紀夫が式場病院に精神鑑定を頼む場面がある。p285 “彼は、式場博士に何となく親しさを感じていた。…”
70	葉山 修平	パパス氏 上・下	龍書房 2006	下巻に「てこな文化講座」、「季節はずでに」等の章は、市川が舞台。p484“パパス氏は、「てこな文化講座」で何か話をするようにと依頼をうけた。…”
71	葉山 修平	時計	龍書房 2009	p131 “ある晩秋の日、彼は近くの葛飾八幡宮の黄金に色づいた銀杏並木の参道を歩き、…”
72	東野 圭吾	さまよう刃	朝日新聞社 2004	小説の舞台として荒川、江東区、江戸川区、船橋などが出て来る。p241 “「市川のトモヨさんからだったわ」親戚の名前を彼女はいった。”
73	樋口 有介	魔女	文芸春秋 2001	登場人物の出身、物語の伏線として行徳を舞台とした描写が多い。p63 “駅前の大通りを右へ行くと野鳥公園に向かい、左へ行くと旧江戸川の船着場につきあたる。…” p67
74	平岩 弓枝	江戸の精霊流し	文芸春秋 2003	時代小説「御宿かわせみ」シリーズ第31弾。p247 “「あたしの実家は市川の在ですが、八幡へ行ったところに親類が梨畑をやっています」…” p279
75	平林 初之輔	平林初之輔探偵小説選 1	論創社 2003	p296 “そして妾たちは、タクシーで両国駅へついて、それから市川で降り、鴻の台まで歩いて行きました。”(華やかな罪過)
76	藤井 邦夫	神隠し	ベストセラーズ 2004	p213 “行徳船は、行徳の塩・野田の醤油・関東や東北の米を隅田川岸の蔵に運んでいた定期船である。”
77	藤原 緋沙子	冬桜	広済堂出版 2003	第四話「寒梅」で、江戸の行徳河岸が出てくる。p266-268 “行徳河岸に人足の遺体があがったという噂が、橘屋に聞こえてきたのは、比較的暖かい朝だった。…”
78	藤原 緋沙子	雪見船	廣済堂出版 2006	行徳と塩問屋が出てくる。p99 “塩問屋富田屋が扱う塩は、江戸近辺でとれる塩が大半を占めていて、特にこの行徳の浜の塩は、ずっと昔から塩会所と契約していて、…”

	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
79	本庄 慧一郎	両国月の縁	廣濟堂あかつき 2009	p73～ 第二話「行徳の俎板」 “行徳生まれの行徳育ちのおみねは・・・”、“本行徳にあるその船宿の屋号は万年屋という。”
80	増田 貴彦	蛇ノ目屋乱兵衛裏始末	広濟堂出版 2004	p174 “辰巳のお京は行徳の船宿・高瀬のお座敷に呼ばれていた。” p177,189
81	宮尾 登美子	宮尾本平家物語 1～4	朝日新聞社 2001 ～2004	3巻p310 “「名は何と申す」と聞くと、俯いたままで、「はい、手古奈と名乗っております」時子はえ、と驚いて、「手古奈と申せば、あの下総の真間と関わりがあつてのことか」・・・”
82	宮城 賢秀	隠密助太刀稼業	角川春樹事務所 2000	p180-189「押し込みの真相」の章では、小網町の行徳河岸から本行徳までの経路や行徳での様子が描かれている。
83	宮城 賢秀	示現流秘蝶剣 3 閃刃	広濟堂出版 2002	「大和田村への旅」「法華経寺五重塔」の章がある。その他の章でも、p111 “「まずは、下総国葛飾郡大和田村を訪ねるつもりじゃ」「八幡ノ不知藪の近くでございますな」” 他
84	宮城 賢秀	道中奉行隠密帳	学研 2002	p63「佐倉道八幡宿」 “ちなみに、下総国葛飾郡八幡村(高四百八十九石余)は、幕府の領地である。” 他 p78,88
85	宮城 賢秀	剣賊	学研 2002	徒目付事件控シリーズの3巻。p171 “「はい。そこから毎日、本行徳と木更津湊へ五大力船が出ています。」”他 p178, p206
86	宮城 賢秀	八丁堀父子鷹 3	桃園書房 2002	p224 “むろん、栄も伴っており、秋元は本行徳の旅籠に泊まっていた。”
87	宮城 賢秀	群狼狩り	コスミック出版 2003	p70 “正午、権兵衛と公卿鷹は江戸川を渡り、市川宿で馬を替えた。途中に八幡宿があり、市川宿から鎌ヶ谷宿まで三里(12キロ)余りである。”
88	宮城 賢秀	戦国群盗伝	広濟堂出版 2004	p161-「須和田の隠所」 “太田新九郎と鬼麿と正次は、下総国葛飾郡の須和田へ向かっていた。” 他 p182, 189
89	宮城 賢秀	月下の三つ巴	学研 2006	p233「下総出張」 “そこは、下総国葛飾郡市川村(高九百二十九石余)のうちである。そこは真間山弘法寺領三十石のうちであり、真間村と称されていた。・・・”
90	宮城 賢秀	家康の隠密	角川春樹事務所 2007	p45 “新九郎と鬼麿は明日、牛島周辺を一巡してから、下総国葛飾郡の行徳まで行くつもりである。・・・” p138
91	宮城 賢秀	暴れ琉人剣	角川春樹事務所 2008	p76-77 “そこは下総国葛飾郡本行徳村の新河岸であり、定期便船は出たばかりである。・・・『笹屋鯉鈍』で蛸小僧と落ち合い、・・・”



	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
92	宮城 賢秀	東宝争議の闇	学研 2008	p112 “市川市出身の十八歳の二人が、こまめに動いていた。”他 p218,253-255
93	宮城 賢秀	辻政信と消えた金塊	学研 2009	p299 “李は、千葉県市川市へ向かった。市川市には、李の義理の母親がいた。”
94	宮城 賢秀	裏柳生探索帳	学研パブリッシング 2011	p19-20 “和田派の五人は、下総国葛飾郡市川村(高九百二十九石余)へ向かっていた。…” p28,33
95	宮部 みゆき	初ものがたり	PHP研究所 2001	単行本・文庫未収録の「糸吉の恋」を含めた愛蔵版。p252 “「おしんさんたちは、竹蔵さんの親戚を頼って行徳の方へ行くことになって、…」”他 p256 (糸吉の恋)
96	宮部 みゆき	楽園 上・下	文藝春秋 2007	上巻p173 “「一九六五年だったですがね、六年だったかしら。わたしらが行徳へ行って、十年は経ってたと思います。卒中でした。大酒飲みでしたから、先生」”他 p177
97	村上 春樹	海辺のカフカ 上・下	新潮社 2002	上巻p126 “「私の家は千葉県の市川市にあったんだけどね、…」”
98	村上 春樹	1Q84 BOOK1	新潮社 2009	p43 “天吾は説明できる場所は、できるだけ正直に説明した。千葉県市川市で生まれて育った。…” 他p167,340
99	村上 春樹	1Q84 BOOK2	新潮社 2009	p91 “あるいは日曜日の朝、母親の後ろをついて市川の商店街を歩いていた。…”他 p349,440,486
100	村上 春樹	1Q84 BOOK3	新潮社 2010	p143 “青豆の両親の現住所は千葉県市川市になっていた。三十五年間に二度引っ越しをしたが、どれも市川市内になっている。…”他 p146-147,190-195,196,202,205,433
101	村松 友視	永仁の壺	新潮社 2004	p140-141 “郭沫若の申し出を即座に引き受けて、市川に住む親しい知人に依頼し、郭沫若の隠れ家を世話してもらうことになった。間もなく郭沫若は市川に移り住み、…”
102	安岡 章太郎	鏡川	新潮社 2004	p5 “江戸川は、たぶん私が物心ついて最初に見た川だ。…”p6 “市川には、江戸川の支流の真間川というのがあって、子供の頃には随分深くて大きな川のように思っていたが、…”
103	山田 宗樹	黒い春	角川書店 2000	p185 “「待ちなさい。千葉県の市川にはあるはずですよ。…自然博物館の職員が、毎月『市川自然だより』という冊子を発行して、それにニオイタデの記述がよく出ています。」”他 p186
104	山本 一力	草笛の音次郎	文芸春秋 2003	時代小説の一篇。行徳の船着場の様子が描かれている。p44

	著者	書名	出版社、出版年	市川言及箇所
105	山本 一力	梅咲きぬ	潮出版社 2004	p97 “江戸屋が店で用いる塩は、播州赤穂産の上物である。しかし握り飯には、行徳産の並塩を用いた。…”
106	山本 一力	菜種晴れ	中央公論新社 2008	p419 “弦蔵は顔見知りの行徳浜の船頭の操る塩船とすれ違った。”
107	吉岡 道夫	ジパングの艦 上・下	光人社 2001	下巻p306 “「はい。…いま大鳥殿はあくまでも薩長と戦う覚悟で、同志を募られております。上総の市川に渡り、関東の兵を糾合して東照宮に立てこもることになりそうです。」”
108	吉岡 道夫	ぶらり平蔵 奪還	コスミック出版 2011	p274 “ほかの一味の者は江戸御府内から遠く離れた江戸川沿いの下総の市川村にある逸見家の別邸を借り受け、そこを塹にして住まわしている。” 他p312- 国府台の奇襲

このリストは2000年以降に出版された市川が登場する小説のリストです。図書館ホームページの「市川の文学データベース」には、2000年以前に出版されたものも含めて、市川市を描いた作家と、市川市に関係する文学作品を調べることができます。どうぞご覧ください。

また、これ以外にも市川が舞台になっている小説をご存知でしたら、ぜひ図書館までお知らせください。